
乱痴氣 Final Fantasy学園！？

ALFRED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乱痴氣 Final Fantasy学園！？

【著者名】

N5769D

【作者名】

ALFRED

【あらすじ】

これは、FinalFantasyを異常な愛を注いだ乱痴気騒ぎである。あのキャラクターたちを何処まで壊しきれるか。え？ アイツにそんなことさせるな？ 残念ながら、本当に異常なのは、…… 作者（俺）です。

第一話 ヒーローと愉快な？（FF4

チャイム音（上昇音）

～～この小説は、Final Fantasyを異常な愛しかたをしてしまった、学園物語である～～
～～この小説を読んで、精神をきたす、こんなにこのキャラじやない、は受け付けられません～～

～～なぜなら、Final 小説だからさ ベイベー～～

～～なお、FF 本編とキャラが違い、ぶつ壊れているのは仕様なので悪しからす～～

チャイム音（下降音）

では、楽しめるの方は、お楽しみください

「楽しめるわけない！」

それは、僕の魂の叫びだった。

最終幻想学園 4組寮。

高等部2年、セシル・ハーヴィはこの度、幼女と過ごすこととなつた。

実際に、ラノベっぽい主人公の展開だった。
「……まあ、今年最後の学園生活だ。思いつきり楽しめ」

親友に言われて返した台詞が、冒頭である。

「待つてくれ！ カイン、誤解だ！ 違うんだ！ ……」

では、回想はじまりはじまり

~~~~~

田覚めたら、やわらかい感触とともに、腕の中に幼女がいた。

~~~~~以上終了。

「で、寝坊したお前を起こしに来た俺が、発見したわけだが」「何かの間違いなんだ！ 頼む、カイン！ 落ち着いてくれ！」「まずはお前が落ち着くべきだ。セシル で、ローザは俺が貰うと」

「何でだよ！ あげないよ！ 彼女は僕のだ」「独占欲の強い奴め そうか！ そ、そんなつつ」

急に悲痛な表情で、崩れ落ちるカイン。

「こ、こんな急展開なんて、あ、あんまりだ ローザ」「私がどうかしたの？」

はい、ここで一人、大パニック。

だつてここ男子寮つすよ？

最初はからかっていたカイン君だって、竜兜ぶつとばしててんてこ舞い。

「違うんだ！ ローザ、誤解だ！」

「そうだ！ 君とセシルの子供じゃないんだな！」

「そうか、その手があつたか、ナイスカイン！」

「……はあ？ しまつた！ 敵に塩送つてしまつた

ローザさん、ちょっと困惑気味。

で、部屋をのぞくと、狭い一室の奥に、布団一枚。そこには緑色の髪をした可愛らしい女の子が メシリイ

ドアノブが握りつぶされました。（精神的意味で二人『ひいいツ！』

「……セシル？ カイン？ ちょっとお話しましょうか？」

冒頭、第一話から死亡フラグ満載つてどれだけ壊れた話なんでしょう。

進まないから、ひとつ起きて、ロリキャラ～～

「ZZZ～～」

「セシル、何をしたかしらないけど。黙つててあげるわ

「嗚呼、ローザ！」

「で、何処に埋めるの？」

黒ヒロイン 登場 !?

「ローザ！ 何かすごい勘違いしてない？」

「だつて、暗黒剣を失敗しちゃって、死体を隠し切れなかつたんでしょう？」

大丈夫よ、私とカインは貴方を信じてるわ。あれは事故だつたの

よ

「え、俺？」

「事故も何も起こしてない！ 僕は無実だ」

「ええ～ 無実じゃないでしょ？ 私のお母さん、×しちゃつたでしょ？？」

少女、起床！

「ダメだ！ 何かわけわからない！」

「私にはわかるわ。オヤシ（口押さえられる）」

「ナニヲイツテイルンダ ろーざー いろんな意味でそれは危険だ！」

「落ち着け、セシル」

「落ち着けるかカインツ！」

「ローザも実はパニックつている……」

「言われて、ローザが、奥様笑いをあげながら硬直 そのまま後ろへ」「インと倒れてしまい……」

「……とりあえず、落ち着いた。ありがとう、カイン」

「良かつた。何もしていながな」

「えつと、まず初めましてって言った方がいいのかな？ かな？」

とりあえず、その某セミの一種が鳴くミニステリー 路線から離れましょ♪。

「なるほどなるほど、懐かしいな」

「……僕らが悪だった時代だね」

何があつたかちゃんと説明しやがれ、フルフェイス鉄仮面コンビ。

「つまり、昔 一人がまだ、悪だったころ……」

回想シーン再び

あれは、僕らがまだ高等部入りたての頃。

隣町の幻獣異端学園 余りにも荒れていて、よく最終幻想学園と揉める、不良学園

そこに、ローザが泣いたんだ。

なんでも、御流米坐とか言う不良集団が釣るんで、腕つ節の強いカインを引き込むための餌になつたらしい。

僕は、父の制止も聞かず飛び出して、親友と彼女を連れ戻そうと、幻想学園の生徒と孤軍奮闘を果たしたんだ。

そのとき、一人の女性教諭を巻き込んでしまつたんだ。

……その娘が

終了

「はい、私のお母さんです」

彼女だと。リディアちゃんだそつだ。

「お母さん、アレから辞職しちゃつて

「このままじゃ、生活が苦しいからって

「そうか

「責任取らせに、嫁行つてこいつて

「娘に何仕込ませてんだよ！ 母親ツ！」

「大丈夫大丈夫、お兄さんの布団に勝手にこもぐりこむだけで良いって、お母さんが」

「君のお母さん、本当に凶太いなああ！」

セシル君、もんどううつて、狭い室内を大暴れ

「落ち着け、セシル。俺は今日、何回お前をなだめねばならんのだ」

「……わかつた、落ち着く」

とりあえず、出がらしのお茶を一杯、がぶ飲み。

セシル、改めてリディアちゃんに向き、

「でも、JUNは男子寮。それに、学年が違いますからだね。」

「編入試験なら受かりましたよ？あと、学園の許可だつて」

「嘘だアアア！（絶叫）

『ローザ！（いろんな意味で）ダメだつて！』

暴走しけけの彼女さん。作者も思いもよらぬ豹変に、ちょっと後悔。

「えつとですね。セシルさんにお兄様と叔父様がいらっしゃいましたよね？」

「え？ フースーヤ爺ちゃんに、ゴルベ兄さん？」

「そのお爺様が快諾してくださったんですね」

「……フースーヤって、ジムニーームーン会社の副会長かよッ」

「あとはお金の力よつて、お母さんが言つてました」

「頼む！ そっちの方が物凄く頼りになるから！ 流浪の身だつて簡単に救つてくれるよ！」

「お兄さん、曰く。セシルへ『まあみる』、つて言えばわかるつて」

「何故なんだ！ 兄さんシツシツ！」

なお、カイン硬直中。

当時、御流米坐の組織の裏Bossがその兄なのは、いまだにセシルには内緒だつたりする。

「ぐう！ 断固抗議する。おのれえ、兄さん」

「あのお、力んでいるとこ、悪いんですけど？」

と、リティアちゃん。壁掛け時計を指差して

午前、8時をお知らせしていた。

「遅刻しちゃいますよ？」

なお、このあと、4組に彼女が飛び級で転校してきて、
なおかつ召喚師特待生だつたりとか、
どつかの忍者野郎が口リ属性を發揮したりとか、それはまた、別
の機会に

「だあああ！ 遅刻するううううう！」

鉄仮面に学ランが激しく不一致だが、セシルと愉快な仲間たちと

「だあああ！ 遅刻するううううう！」

その曲がり角で、やはり遅刻したらしい学生が

モーターサイクル（注：ようはバイク）を全力全開でかつ飛ばして

王道なら　ここで衝突して。

つて、そのネタは運命の出会いの王道なんだけど
ここで使っても良いよね？

バツゴーーン

第一話 ヒーローと愉快な？（FF4（後書き）

樂屋部屋

セシル「……僕が、嗚呼、僕が……」
リディア「私、こんなことしない」

カイン「やれやれ（諦め

ローザ「（赤面、言つ言葉が見つからない」

ALF「ふつ、受ければいいのだよ、受ければ！」

セシル「受けないよ！ こんなことして、何が楽しいの！」

ALF「俺が楽しい！」

カイン「こいつ、小説舐めてるだろう（拳ワナワナ」

ALF「馬鹿野郎！ カイン、よく聞け！ ここはシリーズFF本編じゃねえ！ この世界ではな、場合によつちやカイン、お前が口一ザをゲッチュできつかもしれねえんだぜ！」

カイン「（白け）」

ALF「そしてリディア、俺はFF4は時代を先取りした最先端の作品だと、常日頃切実に思つてたんだな！」

リディア「はい？」

ALF「それはYōuだ！ 口リ！ FFシリーズ始まつて初の、口リ！ しかも悲劇のヒロイン系！？」

何この王道！ ポロパロ双子シリーズまであつて、何だ？ この力オスツ！」

セシル「ダメだ、脳みそが腐つている……」

ALF「セシル&リディアも悪くない」

セシル「ちょっと待つた！ 作者、その路線はしらせん氣か！」

ALF「ラノベ主人公の王道だろう！ だが、これはFFファンノベル。お前ばつかに構つてられん。次は奴だ……」

カイン（全員分書く気か、コイツ……）

第一話 ヒーローとぶれいんぐりっしゅ（FFF7）

なあ～つはつはつはつはつは～！
突然だが、俺はお花畠にいる！

……記憶が飛んでるな。レジビードラック？

えっと、確か

曲がり角で、鉄仮面二匹とロリ、それと別嬪に接触事故、予知

以下、回想

黒い鉄仮面が「うわあ！」って叫んで 別嬪さんが「危ない！
セシルッ」って、黒仮面押し飛ばして、「危ないローザ！」って
竜仮面が突き飛ばして

社会的常識からかんがみて、仮面一人はセーフだと思ったが、お嬢さんの面子もあるう、ここは

「ハアツハツツツツツ～！ ソルジャー部 クラスファースト！ ザ
ツクス様の腕をとくとみやがれええええ！」

いえ、明らかに左右不確認の君が悪いです。はい。

はつ～？ 今、何か聞こえた。

神（作者）の声です。

やつぱしー！？　ijiJ天国かよー

……（やつぱ、死後の世界編とか作ろうつかな）

なんだ？　この作者？　やる気が見る見る失っていく

……はいはい、さつさと回想に戻ろうね。（あかん、陽気系キャラは逆境楽しむからつまらん）

そう、俺は自慢のウイリーをハーディディトナで、ぶちかまし四人の眼前で

そり、吹き飛んだんだ。

向こうの壁を越えて　ひゅーーーん、どしゃつ……

「よつじや、Welcome to 地獄へ！」

「イヤアアアアア！　腐乱死体が何かほざいてるうううううー！」

はっ！

「気がついた？　すげいつなされてた　あつてえツツツー！？」

がばつと飛び起きて、彼女の額とガッテン！

ちょっと涙目になつてから、……そり、彼女は

「エアリス？　エアリスじゃんか！　……つて、何でここに？」

「ここは学校別棟、聖シンラ教会だよ。ついでに園芸部部室」
言われて、俺はお花畠は彼女の丹精込めた花々だと気づき、すぐ
に飛びのいた。

いやいや、飛びのくだけじゃダメだ！

横転してるティトナも立て直して、下敷きになつているチョコボ

頭を

ちょ！ お前ツ！

「なんて美味しい場所に……じゃなかつた！ なんでこんな状況になつてんだよ！」

「それはこつちの台詞よ！ 何よきなり天井突き抜けてきてえ！」

怒鳴つたのはエアリストじゃない。あのナイスバーティーは……ティファちゃんじやねえか！

なるほど……俺は天井まで跳ね上がってから落としたのか！？
俺、すんげえ！

……じゃなくつて！

「不可抗力だ！ ティファちゃん。それより、コイツ！ 頭大丈夫なのが！」

「大丈夫じゃないわよ！ 今見つけたのよ」

「今かよ！ サッさと引っ張り出すぞ って、うわあああ！ 潟

落にならねええええ！」

黄色と緑の花々の中で、真っ赤なお花があああ
退学、かな……

(……案ずるな、ザックス)

……？

保険医の先生を呼んでもらって、俺とエアリスが濡れ手拭いでソ
イツの額を冷ます。多分、あつてるよな？

止血は知ってるのに、脳震盪にかんじちゃこれ、脳震盪で済
むのか？

「……大丈夫？」

「なあに、コイツは俺と同じ、頑丈さ
一緒に雪山登つて降つた仲だ。そう そう簡単に

「……ん」

と、ソイツの眼が開いた

……怪しい輝きをしていた。

「大丈夫？ クラウド……」

「大丈夫？ そうか、俺は 」

「嗚呼、クラウド！ 無事だつたか！」

いや待て、まだ安心できん。保険医に頭見せないと
「俺は、あの上から落としたのか」

……マジで頭見せないと不味い？

卷之三

「……俺か？　俺はクラウド。ソルジャー・クラスファースト」

マジで頭見せないと不味い！

「アラカルト」

「どうしたんだ? エアリスト 戦くエアリスト、ここの俺が

「つてヨイ！ エアリスはわかるんだな！」

「を、俺はわからんねえのかよ！」

なんて不順な奴 女の子の名前は覚えてやかるんだな!!

一 鳴呼、
アンタ……その制服、ソルジャー一部か?

俺ら、ソルジャー部つてのは、私的に制服を改造しているのだ。
特性ベルトに肩アーマーで、有名になつたら肩アーマーに自分のロゴつけようとかさ。

「お、おう
ソルジャークラスファースト、ザックスさんだ！」

「知らん」

「ああああああああああああああ！」
言いやがつたなあああああああ

ああ！

そりやそーーーだらおーーーなああ！

どーせ皆、美形のセフィロスやら、花形のジエネシスばっかだよ

！

「（きゅぴーーん）！？ フイ、ロス？ ……嗚呼、頭が、

割れるよつこ。あ、熱い やめる、 フィロス」

「嗚呼！ 動けるんなら保健室、いや医者行くぞ医者ああ！ つたぐもおーーー」

手を掴もうとして、クラウドは俺の手を弾いた。

「気安く触るな そうだ、俺はソルジャー……ソルジャーなんだ。

俺に必要なのは、戦場」

「全国大会はもう夏に終わつたつうの！」

「……アンタたちについてなんて興味ないね」

「うつせえ知るか！」

「……やる気か、この俺と」

と、その傍で墓標として立っていた 俺の、先輩……

「て、手前H！ その剣に触れんじゃねえ！ それはアンジール先輩の……」

（すまんな、ザックス……失敗した）

「あ、アンジール先輩！」

「うつそ？」

Hアリスまで そうだった、Hアリスには不思議ちゃんパワーがあつたんだ。

「Hアリス 先輩に話聞いといてくれ、びつやら俺は……」

嗚呼、ちつくしょおーーーアンジールのバスターード、って、ア

レ糞重たいんだぜ？ なんで簡単に振り回すんだよー。

「俺は、トチ狂った馬鹿に田覚ましパンチを食らわせてやるぜー。」

ドンガラガツシャン！

「……えっと、アンジール、先輩ですよね？」

（嗚呼、わけあって、後輩の願いを聞いて、ここに血縛靈になつて
いるが……）

「クラウド、何があつたんでしょう？」

ドンガラガツシャンバツキンゴツガングワツシャアン「あ、コト

（ザックスは屋上からバイクごと落下してきたんだ。

無理もない、クラウドの体から魂とライフストリームが離れ離れに
なりかけでな……。

でだ、代替案として 私の体 この靈体の大部分を使用して、
離れた魂を繋げたんだ 結果（

「嗚呼、先輩の記憶とクラウドの記憶が二つちやに」

（それだけじゃない。あの青年に憑り付いてわかつたのだが、どう
も私やザックスに憧れを抱いていたようだ……それが）

ドンガラガツシャンバツキンゴツガングワツシャアン「あ、コト
！ お花踏むんじやねえええ！」「貴様はもう、三回踏んでこる
「だあああ工アリスト」めん！」

「あああああ！？ 許さない！ ザックスゆるさないんだからあ
あああ！」

「な、ちょッ！ 待つた！ 一人掛かりはって、何でエアリスそつ
ちいい？」

アンジール先輩、ほのぼのと呟く。

（歪んだ形で叶えられた力だが、まあアイツがいれば大丈夫だらう
……）

そして、成仏。

これが後の、最終幻想学園、七不思議。枯れない花とその守護者、
の物語となるのは、はてさていつなのだか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5769d/>

乱痴気 Final Fantasy学園！？

2010年11月18日14時43分発行